

## 医療情報をもたらす病院建築への変革

## より効果的な医療を地域に～医療情報をもたらす病院建築への変革～

五十嵐 徹也 筑波大学附属病院 副院長

病院の質を決定する要素の第一は最適最善の診療である。建物・設備をはじめとしたハードと、組織・システムなどのソフトはその診療を確実にサポートしなければならない。次に診療は安全に提供されなければならない。これまたすべての病院環境は起こりうるリスク防止の策を講じておく必要がある。そして、すべての診療プロセスは快適に提供されることが重要であり、これはカスタマーの健康レベル、患っている疾病、身体機能、精神・心理状態、健康知識などの多様性に対応できるバラエティ、フレキシビリティが求められる最も難しいところであろう。それでも様々な工夫が凝らされ、数多くの優れた病院が作られてきた。これまで、特に地域の基幹病院レベルの施設では一つの完結型病院が目指され、基本的にすべての診療機能が院内の診療チームと受診した患者との間で完結されるように提案され、設計されてきたように思われる。近年、地域医療に対する考え方が変わりつつあり、様々なレベルの連携が重要なウェイトを占めるようになってきた。病院の作り方もこのような流れを反映し、少しずつ変わってきたように思われるが大半は相変わらず完全型病院であり、地域全体の医療を設計するという発想で病院が作られた例は決して多くないであろう。このことはもちろん設置母体が多様である日本の医療構造の中でそのような求めがあまりなかったことにもよるのである。医療変革のめまぐるしい米国では、近年、地域のNPOが主体となって人口200万程度の地域に計画的に医療施設を配置し、必要とされるすべての医療関連サービスを網羅的に提供する統合型ヘルスケアネットワークが発展しつつある。我が国でも、一部のグループ病院や国立病院機構などでこのような方向を目指す動きが見られつつある。一方、破綻に瀕している我が国の医療保険制度は大きく地方単位にシフトしつつあり、今後医療は地方・地域を一つの単位として考えなければならなくなっており、このことは言い換えればいかに医療を含めた地域の魅力を設計し、人々に移り住ませるかという地域間競争がスタートしているのだとも言えよう。このような状況では米国の事例でもわかるように重複投資を避けた地域の賢い医療システムを作り、すべてのレベルの医療・福祉・介護など健康関連サービスが住民のニーズにジャストフィットするよう計画されなければならない。すなわち一つの素晴らしい病院を作れば済んでいた時代はそろそろ転機を迎えていると言うことである。

医療情報技術の進歩は、地域に点在することになる役割分担を持った各医療施設を限られた人的資源で効率よく運営し、かつハイクオリティの診療を維持することに大いに力を発揮した。同時に、人にしかできないサービスの何であるかをあらためて知らしめたという点も見逃せない。さらには、情報システムを通じて、医療にかかる原価や経営内容が透明化され、建築・設備に投下されたコストの効果・妥当性までもが客観的に評価されることとなり、医療に投資するということの意味を医療人も、国民も、ベンダーも明確な形で把握できるようになるということの効果は極めて大きいものと考えられる。